

2018年
5月号

人とのつながりで満たされた家

記念すべき1回目は、リノベーションした自宅を“住み開き”している伊藤千春さんのお住まいです。伊藤さんは“itochiha(イトチハ)”として、人と人をつなげる活動に積極的に取り組まれています。住み開きとは、自宅をさまざまな人が訪れるパブリックスペースとして共有すること。新たなコミュニティ創出の取組みでもあります。伊藤さんも、ギャラリーやイベントスペース等として開放されています。



20代半ばで建築に興味を持たれた伊藤さん。専門学校卒業後、設計の仕事に携わる中で「自分たちでリノベーションしたい!」という想いが強くなったと話します。自由に手を加えられる物件を探して出会った桃谷の古民家。空き家だった家屋の内壁や床の張り替え水回りに至るまで自らで改修。費用を抑える観点でも工夫された室内は、使えるものを極力残し、昔ながらの家屋の良さが存分に生きています。

玄関から続く土間の突き当りはなんとお風呂!ガラス戸の浴室に驚くと「壁をつくると土間の突き当りが暗くて空気が滞ってしまうのが嫌で。」とのこと。「好きな時間はお風呂の時間。特に明け方のお風呂が好き。波板の屋根が、空の気配や小雨の雨音まで伝えてくれる。家の中にいながら外を感じられるのでお気に入りです。」狙い通り光と風が通る贅沢な空間です。



「ここは、昔から住んでいる人が多くて町会活動がしっかり残っている。日常の声かけが自然にある。苦手に感じる人もいるかもしれないが、地方出身の私にはそれが性に合う。“ものづくりのまち”というのも魅力。この家を作ったときも今も、ものづくりを通して新しいつながりができた。とても住みやすいまちだと思う。」と話す伊藤さん。

整然としつつも“温かさ”が漂うお住まいは、人の温もりや優しさに溢れた場所でした。



2018年
6月号

長屋の進化形“NAGAYA”

連載第2回目は、築60年以上の長屋をセルフリノベーションし、自宅兼オフィスとして暮らす小笠原さん。自宅を全て住み開きとして公開されています。

幼いころから「長屋」と縁が深く、長屋ならではの人の距離の近さが好きだとのこと。また、ものづくりが盛んな生野区で昔から定着していた“自宅で働く”長屋暮らしにも、たくさん触れていたそう。馴染みが深い環境と、職住一体のライフスタイルの新しい形を提案したいという強い気持ちから、「長屋に住む!」と心に決め、出会ったのが今のお住まいだと話してくれました。

室内は、部屋を仕切る壁を取り払い、一続きの空間は開放感たっぷり。休日を利用し、2年かけてセルフリノベーションした自宅は、端材を活用することで費用を抑えつつ、水道の蛇口をドアノブに活用するなど遊び心も。

「この空間を見て共感してくれた方が、気軽に始められるものであることも大切に。必要な工程を極限までシンプルにしたり、それでいて憧れを持ってもらえるようなデザイン性に配慮したり。」と住まいづくりのこだわりを教えてくださいました。



▲地下鉄小路駅付近の住宅街にある小笠原さんのお住まい。インパクトのある外観は、民家の中でも一際目立ちます。3歳まで生野区で暮らし、ご祖父母様も生野区の長屋で呉服屋を営んでいたそう。「生野はルーツなんです」と教えてくれました。

全てを自身で手掛けた家屋自体も、あちこちに自然に置かれた工具も、家の全てが“ものづくり”に通じていて、訪れるだけで自然と“ものづくり”を始めたくなる。そう思わせる様々な工夫は、玄関に掲げたコンセプト通りに小笠原さんが仕掛けているもの。

「昔から使われている良いものと現代の利便性の高いものを掛け合わせる、屋外に使う素材をインテリアに取り入れるといった、異なる要素の融合が新しい形を見せてくれる。いろいろなものや出会いを掛け合わせ、新しいものを提案していきたい。」と話す小笠原さん。思いがぎゅっと詰まった自宅は、今までにない進化した長屋“NAGAYA”でした。

